

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 25 日現在

機関番号：37604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010 ～ 2011

課題番号：22730464

研究課題名（和文）

要支援・要介護高齢者のペット飼育をめぐる課題に関する都市部・地方部の比較調査

研究課題名（英文）

Comparative survey between urban and rural area about the problems of pet companions by elderly residents in need of care

研究代表者

加藤 謙介（ KATO KENSUKE ）

九州保健福祉大学・社会福祉学部・臨床福祉学科・講師

研究者番号：30423099

研究成果の概要（和文）：地域の要支援・要介護高齢者のペット飼育に関して、(1) 当事者自身の「語り」に基づく実態把握、(2) 地域内でのサポート体制構築のための実践的モデルの構築・提案、の2点を行った。本研究の結果、(1) ペットとの関わりが高齢者のライフストーリー再構築に寄与することが示唆される一方、支援者からは支援の困難さを強調する語りが得られた。(2) 当事者支援中心の課題設定による「対話」の場の設定・試行の結果、参加者から、支援への直接関与を示す語りが得られた。

研究成果の概要（英文）：In this study, the relationship between pet animals and elderly residents in need of care was examined from narrative approach. (1) The author examined the relationship between the elderly people and their pets, specifically about any benefits or difficulties in their daily life from their own narratives. (2) The author tried to propose a practical model to support pet breeding by elderly residents. As results of this study, (1) The elderly residents narrated their own life stories that were structured by the relationship with the pets. On the other hand, the professionals often emphasized the difficulties to support pet breeding by elderly residents. (2) The authors conducted workshop that emphasized elderly residents' needs, and asked participants to discuss this issue. As results of this practice, the participants showed narratives in which they'll support elder people directly.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：社会系心理学，社会福祉関係，高齢者，ペット飼育，ナラティブ・アプローチ

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 高齢者サポートの社会資源としての「人と動物の関係」

高齢者ケアのあり方は、近年、施設ケアから地域福祉へと移行が進んでいる。地域福祉においては、特に社会資源の開発やそのネットワークが重要であるとされている（例えば、宮城，2008）。介護保険法の施行以後、地域包括支援センターなど、高齢者の地域での生活を支える制度が整えられ、地域内での様々な資源を活用しながら、高齢者がより良い生活を実現するためのサポートのあり方が探られている。

地域で生活する高齢者のサポートのための社会資源の1つとして、「ペット」をはじめとする動物との関係に注目が集まっている。欧米を中心に研究が進められ、古くはLevinson (1969) が、愛情と無条件の承認を提供してくれる存在としてのペットについて論じている。特に地域で生活する高齢者とペットとの関係について、ペット飼育が、高齢者に対して、生理的・心理的・社会的な効果をもたらしてくれることが指摘されている(Hart, 1997; Baunら, 2007; 安藤, 2003)。

しかし、国内では、地域で生活する高齢者とペットとの関係に関する調査研究は多くはない(安藤, 2003)。研究例としては、都市部と地方のペット飼育状況を比較した調査(安藤ら, 1997)、ペットとの情緒的交流と精神的健康との関連に関する調査(安藤, 2008)などが挙げられる。その一方、高齢者にとってペット飼育は時に負担をもたらすこともあり、衛生管理の難しさ、しつけの不行き届きによる事故、外出時の不便、住環境の問題、経済的負担、動物・飼い主の病気・死亡をめぐる不安などの問題が指摘されている(例えば、山口, 1999; 柴内, 1999)。しかし、これら諸問題についての調査研究は、国内ではほとんど行われていないのが現状である。

地域で生活する要支援・要介護高齢者にとって、ペット飼育は様々なメリットをもたらす可能性があるが、同時に、様々な課題も存在すると考えられる。地域で生活する高齢者の個別のニーズに応えるために、まずは当事者自身の「語り(ナラティブ)」を丹念に聴き取り、高齢者とペットとの関係の実態を把握するとともに、その関係を、地域における新たな『社会問題』(e.g., 中河, 2001)として構築する必要がある。それによって、高齢者ケアのための社会資源の1つとしてペットを位置づけられ、より良い地域福祉の方途が見出せる可能性があると言えるだろう。

### (2) 研究への着想の経緯

筆者はこれまで、「人と動物の関係」のうち、特に治療場面における動物・ロボットを媒介とした集合体の規範の生成・変容過程に

ついて、高齢者施設でのアニマル・セラピー等を事例として研究を重ねてきた(e.g., 加藤・渥美, 2002; 加藤・渥美・矢守, 2004; Kato & Atusmi, 2005)。また、2004年より地域における「人と動物の関係」を題材とし、横浜市磯子区・西区・鶴見区の『地域猫』活動事例に対して調査を進め、その『対話』の特徴・及び活動が直面する課題について、グループ・ダイナミックス(e.g., 杉万, 2006)、ナラティブ・アプローチ(野口, 2005)等の理論的観点から研究を行っている(Kato, 2005a, b; 加藤, 2006a, b, d; Kato, 2006b; 加藤, 2007d; Kato, 2007; 加藤, 2008; Kato, 2008)。

このうち、特に横浜市鶴見区での『地域猫』活動についての最近の調査から、地域での動物飼育をめぐるトラブルにおいて、(1)当事者が、高齢者・障害者など福祉サービスの利用者である場合が多いこと、(2)トラブルに適切に対処するためのサポート体制がほとんど構築されていないこと、を見出した(加藤, 2009)。また、地方都市の事例として、2009年8月・9月に宮崎県延岡市において予備調査を実施し、(1)いち地域包括支援センター・居宅介護事業所の範囲内で、約1割の要支援・要介護の高齢者がペットを飼育していること、(2)高齢者は、概ね同居家族等の支援をうけてペット飼育を楽しんでいるが、時として深刻なトラブルの原因となっていること、などの知見が得られた。

これらの研究より、地域における要支援・要介護高齢者のペット飼育について、まずはその実態把握が急務であるとともに、飼育をめぐるメリット・デメリットを適切に捉え、高齢者自身の「語り(ナラティブ)」を踏まえた上で、ペット飼育にかかわる高齢者のサポート体制の構築を目指す理論的・実践的な研究が求められていると言える。

## 2. 研究の目的

本研究では、地域における要支援・要介護高齢者のペット飼育について、(1)当事者自身の「語り(ナラティブ)」をもとに実態を把握すること、(2)地域内でのサポート体制構築のための実践的モデルを構築・提案すること、の2点を行った。

具体的には、都市部・地方部での比較調査を実施し、要支援・要介護高齢者のペット飼育にかかわる複数の当事者集団が、ペット飼育をどのような「問題」として捉えているか、その実態を把握した。その上で、地域でのサポート体制構築のための住民参加型「対話」技法の構築・提案を試みた。

## 3. 研究の方法

本研究では、(1)高齢者のペット飼育及びその支援をめぐる語りの収集、(2)支援のた

めのネットワーク作りに向けた「対話」の場の試行、の2つの方法を採用した。

(1) 高齢者のペット飼育及びその支援をめぐる語りの収集

地方都市の事例として宮崎県延岡市を、都市部の事例として神奈川県横浜市を取り上げ、2010年6月～10月に、ペット飼育経験のある介護保険サービスの利用者（以下、利用者）、及び、利用者のペット飼育支援に関わる可能性のある専門家（以下、支援者）に対して、半構造化面接を実施した。

#### ①利用者への聞き取り調査

介護保険サービスを利用するペット飼育経験者のうち、担当の福祉職員に選定を依頼し、本調査に協力が得られた5名（男性1・女性4）を対象とした。

聞き取りに際して、以下の質問項目を設定した。1) 利用者自身に関する事柄：年齢、同居家族の有無と構成、日常生活のリズム、既往症等。2) 現在飼育している、あるいは過去に飼育した中で最も印象に残っているペットに関する事柄：ペットの品種・飼育年数、飼育するようになったきっかけ、日常生活における利用者とペットの関わり方、ペットから得られているもの、ペット飼育で生じた変化、一番の「思い出」、自分にとってのペットの位置づけ等。3) ペットを飼育する上で利用者が直面する問題点・心配事：住環境の問題、近隣トラブルの有無、衛生管理にかかるコスト、しつけの問題、エサ代・医療費等の経済的問題、外出時の不便、飼育上の心理的不安等。それらの問題に対する利用者自身の対処方法、問題の相談相手等。

筆者らは、利用者に質問項目のリストを提示しながら聞き取りを行ったが、話の流れに応じて、適宜質問の順番を入れ替えた。また、本人が答えたくない質問については無理に話さなくてもよいことを事前に伝えるとともに、インタビュー中も十分に注意した。記録については、聞き取り中にメモを取るとともに、許可が得られた3名分はICレコーダーで録音した。利用者のペースに合わせた結果、聞き取り時間は、約1時間～2時間となった。

#### ②支援者への聞き取り調査

支援者としては、高齢者福祉の専門家4名（地域包括支援センター職員2名、ホームヘルパー2名）、動物飼育支援の専門家1名（ペットシッター1名）、行政職員4名（市生活環境課職員2名、保健所職員2名）の3群を対象とした。

聞き取りに際して、高齢者福祉の専門家には、以下の質問項目を設けた。1) 利用者をめぐる諸状況に関する事柄：地区の地域性、サービス利用者の全体的特徴等。2) 担当利用者のペット飼育に関する事柄：利用者のペット飼育の現状、利用者の傾向、ペット飼育

による利用者のメリット・デメリット、トラブルとなった事例の有無とその対処、福祉業務における利用者のペット飼育の位置づけ、自分以外の専門家との連携、総合的な判断による要支援・要介護高齢者のペット飼育の是非等。

ペットシッターに対しては、次の質問を尋ねた。1) 現在の業務内容・これまで関わってきた動物関連の社会的活動。2) 延岡市における高齢者のペット飼育に関する事柄：これまでにかかわってきた高齢者関連の事例、高齢者のペット飼育への支援の在り方、これまでに連携することができた個人・組織、高齢者がペットとともに最後まで生活をするために必要な事柄等。

行政に対しては、以下の質問項目を設定した。1) 延岡市におけるペット飼育の現状。2) 各部署におけるペット飼育関連の業務内容に関する事柄：特に高齢者がかかわるペット飼育をめぐる問題とその対応、問題に対する他部署等との連携の現状と課題、市民のより良いペット飼育を支援するために必要な事柄等。

支援者への聞き取りは、利用者同様、質問項目のリストを提示しながら行ったが、話の流れに応じて、適宜質問項目の順番を入れ替えた。また、会話内容は許可を得てICレコーダーで録音した。聞き取り時間は、約1時間～2時間であった。

#### ③分析方法

各インタビュー結果について、録音内容をもとに逐語記録を作成した。その上で、利用者については、自身とペットとの関係が語りの中にどのようにあらわれるか、その特徴を整理した。また、支援者の語りからは、それぞれの立場から、要支援・要介護高齢者のペット飼育をどのような「問題」と捉えているかを検討した。

(2) 支援のためのネットワーク作りに向けた「対話」の場の試行

高齢者のペット飼育に対する地域でのサポート体制構築のあり方を検討するため、住民参加型の「対話」技法を試行した。具体的には、横浜市磯子区・西区・鶴見区の「『地域猫』活動」推進団体と協働で、要支援・要介護高齢者の動物飼育トラブルに対する「支援者」になりうる専門家（福祉・動物関係者）・市民らによるグループ・ディスカッション（GD）を企画・実施した（2011年2月）。また、実践とあわせて、「対話」の場における参加者らの言説の特徴を分析し、「高齢者のペット飼育支援」をめぐる参加者らの語りの特徴について考察を行った。

#### ①参加者

獣医療関係者・動物関係のボランティア・援助専門職・一般市民ら55名（男性7・女性40・不明8）であった。筆者は、同勉強会に

企画段階から参加するとともに、勉強会当日はコーディネーターの役割を務めた。

## ②勉強会の手続き

勉強会は、大きく2つのプログラム内容から構成された。第1に、横浜市内の病院で勤務する精神保健福祉士 (PSW)、及び、神奈川県保健福祉センター職員から、市内での要支援・要介護高齢者の動物飼育をめぐるトラブル事例とその対応について話題提供が行われた。第2に、それを受け、参加者らによるGDが実施された。GDにおいて、参加者らは、属性が概ね均等になるよう、9名程度・6つのグループに分けられた。グループリーダーは、勉強会企画者 (獣医療関係者・動物関係ボランティア・市民活動家)・話題提供者が務めた。

GDでは、まず、参加者に対して、次のような「状況」が提示された。「隣家に住む独居高齢者に認知症の疑いがある。親族はいないようだ。無分別に猫の世話を続け、近隣から苦情が生じ始めている。高齢者と猫、どちらも助けるために、あなたなら、何ができるか?」。次いで、参加者らは、この問題に対する自分の「相談先」、自分が「できること」、この問題に対して「あったら良いのに」と思うサポート、の3つのテーマについて、意見の提示が求められた。その際、参加者らは、自分の意見を、付箋紙大の用紙に1つずつ記して模造紙に貼付した上で、簡潔に述べるよう指示された。

## ③分析方法

GD内で提示された意見に対して、(1) テーマに関連する言説の抽出 (関連語抽出)、(2) 対応分析、を行い、高齢者の動物飼育トラブルへの「支援」をめぐる参加者らの言説の特徴を検討した。

## 4. 研究成果

### (1) 高齢者のペット飼育及びその支援をめぐる語り

#### ①利用者の語り

1) ペット飼育の状況 インタビューに協力が得られた利用者のうち、延岡市の事例では、4名中2名が、現在ペットを飼育 (犬1・鳥1) していた。また、1名は聞き取りの2年前、1名は2ヶ月前にペットと死別していた。飼育者のうち、1名は家族と同居、1名は近くに親類が住んでおり、散歩やトリミングなどの手間のかかる世話は親族が担っていた。

一方、横浜市の事例では、1名が、独居で猫1頭を飼育していた。この利用者は、長年、猫を多頭飼育してきたが、本人の施設入居に伴い、福祉職員らの尽力で譲渡がすすみ、現在は1頭のみとなっていた。

2) ペットとの関係をめぐる語り 利用者にとって、ペットが、他者との交流のきっかけや孤独感の減少、安心感をもたらす存在とな

っていることを示唆する語りが得られた。一方で、飼育に際しての経済的負担や外出時の不便、死別時の喪失感、適正飼育の困難など、様々な問題を引き起こす可能性も示唆された。

3) ペット飼育をめぐる語り 利用者らは、ペットとの関係について、「孤独感を減らす」「安心感をもたらす」などのことばを用いて、概ね良好なものとして語った。こうした語りは、ペットと飼い主との関係をめぐる「モデルストーリー」(桜井 2002) の1つであると考えられた。

特に、ペットとの関わりは、利用者のライフストーリーと複雑に関連づけられて語られた。本調査では、死別したペットとの関わりの中で、その語りが顕著に見られた。2年前に24年間飼育した猫と死別した利用者は、猫との生活を趣味の短歌として詠み、生活の何気ない一コマの中にある猫の存在感について語った。また、2ヶ月前にペットと死別した利用者は、自身の生活を「寂しい」ということばを頻繁に用いて表現し、うまく語るができなかった。これらの事例は、ペットとの関わりが、死別後もなお、高齢者のライフストーリー再構築に重要な役割を果たしていることを示唆していると考えられた。高齢者とペットとの関係については、その「喪失の語り」についても、十分な配慮をもって聴き取る必要性が示された。

#### ②支援者の語り

1) ペット飼育の状況 延岡市の事例では、インタビュー時点で、ホームヘルプサービス利用者のうち、ペットを飼育しているのは58件中2名 (犬1件、鳥1件) であった。飼育者が2件しかないことについて、利用者のほとんどが独居であることが原因ではないかとの意見が聞かれた。また、地域包括支援センターでは、正確な飼育者数は把握していないが、利用者のうちの数%がペットを飼育しているのではないかと、との意見が得られた。

2) 利用者のペット飼育をめぐる語り 福祉職員、動物の専門家、行政職員とともに、高齢者の動物飼育のメリットを指摘する発言があった。特に、心理的支援や社会関係の促進などのメリットに関する語りは、ペットが人にもたらす良い影響としてしばしば指摘されるものであり、ペットとの関係に関わる「モデルストーリー」の1つであると考えられた。

一方、デメリットとしては、衛生管理の困難、飼育に伴うケガの危険性、経済的問題、近隣とのトラブル等が指摘された。支援者らは、高齢者のペット飼育のメリットを認めつつも、むしろ、デメリット、及びトラブルの方に関心を向け、それへの対応に苦慮していることが示された。こうした語りから、支援者らにとって、ペット飼育をめぐる利用者の

「当事者の語り」を聞き取ることが、困難な状況にあることが示唆された。

誤解のないように付記すると、筆者は、いたずらに支援者の批判を行いたいわけではない。本調査に協力が得られた支援者らは、自身の職責を全うしようと努めておられた。重要なのは、そのような支援者らの懸命の努力「にもかかわらず」、利用者のペット飼育に関わる事柄が、しばしば「困難な問題」として捉えられている、ということである。

野口（2010）、向谷地（2009）は、専門知や制度それ自体が、当事者との「いまだ語られていない物語」の生成を困難にすることを指摘している。本調査に協力が得られた支援者らは、介護保険制度や、動物愛護（及びその管理行政）といった諸制度の下で職責を果たしていると考えられる。現行のこれらの制度では、「要支援・要介護高齢者のペット飼育問題」について、明示的に取り扱われているわけではない。それゆえ、利用者のペット飼育について、専門家らは「限られた時間の中で」関わらざるを得ず、メリットについても「注意を向けることはない」。つまり、ペットをめぐる利用者自身の「いまだ語られていない物語」を聴き取ることが、そもそも困難な状況となっていると考えられる。

また、高齢者のペット飼育、特にその支援に関する問題は、福祉・動物双方の専門家にとって、未だ顕在的に捉えられていない。このため、通常業務の範囲内ではほとんど関わらぬことがない福祉と動物の専門家は、お互いが、この問題の支援のための連携先となりうることを「想定外」（「思いつかなかった」「考えたことがない」と見なされてしまうことが生じうる。

要支援・要介護高齢者のペット飼育支援について考えるためには、まず、当事者による「いまだ語られていない物語」を聴き取り、それを活かす方途を探る必要がある。また、当事者の語りを踏まえた具体的な支援のあり方について検討するためには、関係する様々な分野の専門家が連携し、ソーシャルサポートネットワークを構築するなどの対応が必要となると考えられる。要支援・要介護高齢者のペット飼育支援を行うには、あくまでも「当事者の語り」を中心に据え、支援のためのオルタナティブ・ストーリーを生成するナラティブ・コミュニティ（野口、2005）の構築を進めるための工夫が求められることになるだろう。

(2) 支援のためのネットワーク作りに向けた「対話」の場

#### ①参加者らの言説の特徴

GDの結果、合計391件（相談先：132件、できること：126件、あったらいいもの：133件）の意見が提示された。『相談先』の関連語として、「獣医」「猫ボラ（ンティア）」等

の動物関係者、「友人」「町内会」等の身近な人々、「民生委員」「区役所」等の公的機関が挙げられた。『できること』の関連語として、「本人（に）話しかける／（話を）聞く」等の高齢者への直接関与、「猫（を）捕獲（して）不妊手術（をする）」等の猫への直接関与を示す語が挙げられた。『あったらいいもの』の関連語には、「行政（の熱意）」「動物（を保護する）シェルター」「（行政相談の統一された）窓口」等、公的機関への要望が多く挙げられた。

こうした言説は、「高齢者のペット飼育支援」に対する、参加者らの援助手法と社会資源の布置を示していると考えられる。特に、テーマごとに言説の傾向が異なることが示唆された。『できること』には「支援の担い手としての『個人』」、『相談先』には「支援の担い手としての『組織』」に関連する語が示されたと言える。参加者らがGDの状況設定に困惑しつつも、『できること』として、「高齢者から話を聞く」等、高齢者への直接関与を示す意見を挙げたのは興味深い。「ニーズ」とは、支援者と当事者との相互作用過程で見出されるものである（上野、2011）。それゆえ、各自の立場が違えど、まずは「当事者」である高齢者への直接関与を志向する言説が示されたことは、より良い支援の実践の場においても活用できると考えられる。

一方、『あったらいいもの』として挙げられたのは、「シェルター」「システム」等、（自分達以外の）「理想的な支援元」であった。しかし、ニーズと支援の相互作用性の視点からすると、支援者は、ニーズをめぐる当事者との相互作用を通して、はじめて「支援の『当事者』になる」と考えられる。それゆえ、今回検討した「高齢者の動物飼育トラブル」のような、当事者・第三者にとって必ずしもニーズが顕在化していない問題に対して、「支援の外部化」を示唆するこれらの言説は、むしろ参加者らを「支援の『当事者』」の位置から遠ざけるような関係を生成しうる。支援をめぐる言説を検討する際には、支援者の当事者性に関わるこうしたことばが有する意味についても、注意を払う必要があるだろう。

#### ②「対話」の場の特徴

本調査で実施した「対話」の場には、次の4点の特徴が設けられた。第1に、当事者支援が中心となった課題が設定されていること。第2に、「問題」への参加者自身の関与を促す設定がなされたこと。第3に、動物関係・福祉関係・行政職員等、多様な立場の参加者で場が構成されたこと。第4に、参加者各自の意見・言説が明示化されて提示されるような工夫が設けられたこと。

今回のワークショップの参加者にとって、「高齢者のペット飼育支援」は、必ずしも全員がなじみのある問題ではなかった。それゆ

え、開始当初はどのような意見を表明すればよいのか困惑する参加者も見られた。しかし、こうした背景、及び参加者の多様な属性にもかかわらず、参加者らが「問題」への直接関与を示す言説を提示できたのは、「対話」の場における上記4点の特徴が奏功したものと考えられる。換言すれば、今回の「対話」の場が、参加者らにとって、「高齢者のペット飼育支援」をめぐるオルタナティブ・ストーリーを生成するナラティブ・コミュニティとしての機能を果たしたと言えるだろう。

今回の実践では、「高齢者の動物飼育問題」について、支援者の側の言説生成の場を設けることができ、またその特徴を検討することができた。しかし、高齢者自身による言説や、当事者間の相互作用場面への接続については、十分に考察を深められなかった。今後は、これら支援をめぐる言説を、現実の当事者との相互作用場面・支援の実践に如何に接続していけるかが課題となると言えるだろう。

### (3) 課題と展望

本研究では、要支援・要介護高齢者のペット飼育とその支援をめぐり、当事者・支援者から様々な語りを得ることができた。また、支援のための「対話」技法の実践を試みることもできた。

しかし、特に平成23年度は、福祉現場における個人情報取り扱いの難しさ、並びに、東日本大震災後の混乱から、当初予定していた当事者の語りの収集、及び、地方での「対話」技法の試行・実践への還元を、十分に進めることができなかった。筆者は、本研究の成果を踏まえ、これら残された課題について、助成期間終了後も、調査・実践を進めていく予定である。その上で、都市部・地方部での各知見を相互に交流させ、高齢者のペット飼育に対するより良い支援のあり方について、今後も検討を深める心づもりである。

### 【謝辞】

本研究の遂行にあたり、多くの方にご支援・ご協力を賜りました。調査にご協力頂いた利用者の方々、福祉サービス・ペット飼育の専門家の方々、行政職員の方々、九州保健福祉大学社会福祉学部臨床福祉学科・山崎きよ子教授、小野育恵さん、横浜市地域猫連絡会メンバーの方々に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

加藤謙介、地域における要支援・要介護高齢者のペット飼育に関する意義と課題(2):「喪失の語り」と「支援」をめぐる語り、九州保

健福祉大学研究紀要、査読有、13号、2012、1-8、

〔学会発表〕(計 3 件)

① 加藤謙介、地域における要支援・要介護高齢者のペット飼育とその支援に関する研究：ナラティブ・アプローチの視点から、第8回順正学園学術研究コンファレンス、吉備国際大学、2012年2月26日

② 加藤謙介、高齢者のペット飼育支援をめぐる社会問題の構築に関する予備的考察、日本グループ・ダイナミクス学会第58回大会、昭和女子大学、2011年8月23日

③ 加藤謙介、地域における要支援・要介護高齢者のペット飼育をめぐる語り、第89回ヒトと動物の関係学会月例会「シンポジウムさらなるアニマルセラピーを考える～高齢者施設を中心に～」、医療法人雄風会介護老人保健施設高松アクティブホーム、2011年8月13日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

加藤 謙介 (KATO KENSUKE)

九州保健福祉大学・社会福祉学部・臨床福祉学科・講師

研究者番号：30423099

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし